

## 6. インド・東南アジアに伝わる羽衣説話

—スダナとマノーハラ—

田 辺 和 子

### 1 パンニャーサジャータカとの出会い

私は〔昭和〕52年から53年にかけて2年間バンコクに住んでおりました。その間に、チュラロンコーン大学に通っておりました。サンスクリット語の勉強をしたいと思ひまして、サンスクリット語科のヴィスッド・ブシュヤクルという先生にお願いして、チュラロンコーン大学に通って、その方につきまして勉強させていただきました。

ちょうどその時に、サティヤヴラタという先生が、タイ国王女シリントーンのサンスクリット語の先生としてインドから来ておられました。ヴィスッド先生はチュラロンコーン大学のサンスクリット語科の科長でしたから、インド人のサティヤヴラタ先生は、ヴィスッド先生の部屋に居られました。従ひましてヴィスッド先生から私が教えてもらうのですが、丁度その同じ部屋にサティヤヴラタ先生が居られたわけです。サティヤヴラタ先生が向こう側に座っておられて、私は一対一でタイ人のヴィスッド先生と一緒に本を読みながら習ったんです。先ずはサンスクリット語の『ディヴィヤ・アヴァダーナ』の「スダナクマーラ・ジャータカ」というのを読んでいたんです。タイ人のヴィスッド先生と日本人の私が、片言の私の英語で意思を通じあっていたんです。ちょうど、その時に同室の遠くにインド人のサティヤヴラタ先生即ちサンスクリット語の権威の先生が、座っていらっしゃいました。二人は本を読んでいたのですが、あちらのインド人のサティヤヴラタ先生は何も持ってないんです。そっちで聞いているだけなのです。私はサティヤヴラタ先生に教えて頂けるとは思っていませんでした。タイ人のヴィスッド先生と一緒に読もうとしていたんです。読み進んでいると、あちらにいたサティヤヴラタ先生が「違う」と言うんです。それから、「そこはこうだ」と教えてくれます。私が訳して間違っているときには、向こうから「違う」というのです。

そして「スダナクマーラ・ジャータカ」を読み終わりました後は、11世紀のカシュミールの宮廷詩人のクシューメンドラという人の、また、同じストーリーの『スダナキンナリ・アヴァダーナ』というのを読んだのです。その時も、「インド人はすごいな」と思いました。あの、サンスクリット文を仏教梵語とちがって、いっぱいくつついている、あの、歌になっているものをすらすらと、暗唱しているのです。そのほとんどの場合、訳が、二つに読める場合があるのですね。サンスクリットの文章が二つに読めるのを、とにかく、私などはストーリーを追うだけであり、ただ訳すだけです、サティヤヴラタ先生はただ「そうだ、そうだ」とただ聞くだけです。私が英語に訳してきたのを英語で読んで訳していると、あちらから聞いて、やっぱりただ聞いているだけです、その読み方が違う、二通りの読み方があると教えてくれるのです。訳も二通りの訳があるということを見せてくれるという風でした。そういう貴重な体験をタイで二人の先生から学んだというのを今思い出して、インド人の暗唱力はすごい、あたりまえのことなのですが、すごいと思いました。

そういう中で、サンスクリットのものそれから仏教梵語のものを読んでいくうちに、タイのヴィスッド先生が「実はこの物語は、タイでは小学生でも知っているんだよ」とおっしゃったんです。それは小学校の教科書に出ているんだといわれるのです。実はこの物語は、タイに古くからあって、パーリ語にもあるといわれるのです。しかしながら、それはクメール文字、いわゆる、カンボジア文字で書かれている写本だそうです。それで、私にもこのクシューメンドラが終わったら、それを教えてくださいとお願いしたのです。ヴィスッド先生はアメリカのペンシルヴァニア大学で学んだ方だったのです。その時、私は、まだクメール文字も読めなかったのです。そのクメール文字の写本はどこにあるのですかといったら、ナショナル・ライブラリーにありますと教えてくれました。

ナショナル・ライブラリーにありますと言われましても、私は行動力もありませんし、他国にいますし、その当時、子供が幼かったので、私自身学問への欲が少なかったのですけれども、実は、そのころちょうどいい具合にいますか、恵まれたといえますか、東方研究会の元主事をなさっていらっしゃいました方で、今は明治大学で先生をしているのですが、阿部慈園さんがインドのプーナ大学で学位を取るために、インドで勉強していて、写本を見るため

にインドからタイに来て滞在していたのです。阿部慈園さんは、タイにおける日本寺にとまっていたのですけれども、私がいるものですから、私のうちに1週間ぐらいお泊まりになられたのですね。そのときに実はクメール文字の写本が、ナショナル・ライブラリーにあるらしいので見たいと阿部さんに相談しました。すると、阿部さんは、「ナショナル・ライブラリーに入るにはお坊さんとするのが具合がいい。自分は最初にお坊さんに連れていってもらった上でナショナル・ライブラリーに通っているから一緒に連れて行ってやろう。そして、クメール文字については、そこの図書館の館員が教えてくれるし、ぼくが少し知っているから、教えてやる」といって、結局、一番最初にてほどきをして下さったのは阿部慈園さんでした。阿部さんがクメール文字を私に教えてくれたのです。阿部さんが見ようとしていたものは、私が見ようとしておりましたものと同じではないのですけれども、ナショナル・ライブラリーには他にたくさんの方のクメール写本がありまして、それを利用するためにプーナ大学からタイに通っていました。しばらく滞在してはプーナ大学に帰っておられました。ちょうどそういう時期でした。

そのとき、私はナショナル・ライブラリーに入るということもどうやって入るかということもわかりませんでした。今もそうだと思いますが、その時期には入るのはとても難しいし、他国の者に見せるということはないのですね。阿部先生は次のように教えて下さいました。「まず、最初坊さんと行くこと、それから田辺さん、サンスクリットやっているなら、王女さままでしょ。田辺さんが習っている先生は王女さまの先生なんだよ。しかも、サンスクリットではインドから来ている先生もいるのだから、王女さまの名前を出しなさい。その入り口で、プリンセス・シリントーンの名前を出せば、すぐに通してくれる。本来は荷物を置いていかなければならないんだけど、多分、荷物を持ってはいることもできるだろう」と。本当は筆記用具ならともかく、バッグを持ってはいることができないんですが、私の場合、シリントーンと言う名前と最初に阿部さんと一緒にいったお坊さんのおかげで、実にフリーパスで入ることができて、自由自在にナショナル・ライブラリーで見せていただくことができました。それで、むしろ、あれはどうだ、これはどうだという具合に親切に館員の人が見せて下さいました。今は非常に厳しくなっているそうです。

余談になりますが、図書館員は、もちろん、一日中働くわけなんですけれど

も、それだけでは当時生活できないものですから、午後はタクシーの運転手になるわけなんです。そうすると、私の帰るのが何時から何時というように、毎日私が通うのがわかっていましたからタクシーの運転手として図書館の前で待っててくれると言うくらいになりました。待っているタクシーは危険だから絶対に乗るなという日本人の合言葉があったので、最初はこわかったのですけれども、図書館員というのは国家公務員ですから、公務員なら大丈夫かなと思いつつ、恐る恐る乗ったのです。その方がいつも私のうちまで運転手になってくれたということもありました。

図書館では、そこで、読んだというよりは、クメール文字の写本を見せてもらって書いてノートを作っていて、返して帰るということを毎日毎日しておりました。ところが、最後にマイクロフィルムをもらってみてはどうかと図書館員が教えてくれています、最後に帰ってくる時にマイクロフィルムをお願いして、膨大にある写本のうちのいいものを、マイクロフィルムにして3本もらって帰ってきました。日本に帰るときにそのようにしてもらったわけです。その中にはスダナの物語だけではなくて、50のジャータカ、詳しくは、それ以上あると思うんですけれども、50ジャータカ、タイの人達はパンニャーサ・チャードックという言い方をしますが、タイそれも東北タイでつくられた50ジャータカが入っていました。そして、それは、今までジャータカとして聞いてる中では見たことがないようなものが入っている物語集であるということがはっきりとわかったわけです。そのとき、こういうものがタイには流布しているんだなあ、と思いました。それで、50ジャータカというのを取り混ぜて日本に帰ってきてからやろうという夢を持っていたのですけれども、その当時やっぱりコピーするのに、高価なものですから、小さい文字で何枚もコピーしたのです。日本に帰ってきて大きな拡大鏡を使って読みつづけていたのですが、目がどんどん悪くなってしまったのです。ローマナイズしてテキストにして、あちこちの雑誌に投稿させていただいたのですが、目がどんどんおかしくなって読めなくなってしまったので続けていくことを断念したのです。

## 2 パンニャーサジャータカにおけるスダナジャータカと羽衣説話

今日は、一番最初にタイで勉強いたしましたスダナ王子の物語というものに

ついでお話ししたいと思って用意してきたんです。それは、差し上げましたコピーに出ているのですけれども、スダナという物語が、実は日本にも伝わっております羽衣説話の一形式になっているということで、ここ何年か前からいろんなところで問題にされてきたのです。私は自分でやってきたときには、羽衣説話ということを感じなかったのですけれども、日本文学とか中国の説話をやっていらっしゃる方とかあるいは、タイの説話をやっている方たちが、羽衣説話のひとつのかたちをなしているというようにおっしゃるのです。タイ語で書かれているスダナの物語がですね。スダナとマノーハラーという物語があるわけなんです。それは、パンニャーサ・ジャータカの中の「スダナ・ジャータカ」の翻訳、タイ語訳なんです。それを研究なさる方がたくさんジャータカを集めるようになった。スダナの伝承を集めて、発表することがここ10年ぐらいで多くなってきたわけです。それで、私自身も、その方々のものを読んだり、またスダナの物語がイスラムの方にも入っていると、ある本にも書いてあったりしますので、興味をもってまとめておこうと思って、昨年東方研究会にもちょっと発表したのです。それをもう一回自分の頭を整理しておこうと、用意したわけです。

まず羽衣説話の基本形式について関敬吾先生がまとめていますので、それにもとづいて考えてみます。まず、男が、水浴している天女（ないし、鳥）の羽衣を隠し、天女を妻にするが、天女は後に隠された羽衣を見つけ出し、彼女の故郷に帰ってしまう。そして男は、彼女のあとを追って天に行き着くという、これが基本形式だというのです。これは皆様もご存知の日本に伝わる羽衣説話ですから、よくおわかりになると思うのです。はじめの部分が鳥であったり、天女であったり、次にいろんな要素などが加わったりするわけです。天女というのが鳥であったり、あるいは、人・非人であったりします。人・非人というのは、キンナラです。鳥のような、人のような、そうでないようなということで、漢訳で人非人となっているんですけども、あれは、人かしらというのがキンナラです。そういうような姿であったりとか、あるいは、その男が、なんで捕まえるのかというそのはじまりのはなしには、いろいろ付加があるわけです。あるときには、洪水伝説であったり、また、あるときには、浦島伝説であったり、というように始まりが、ちがってくる。天女が帰ってしまう理由には、その男が嘘をついたからだとか、いろいろ理由があるわけですね。

それから、男が追いかける部分ですが、これは、天に行き着いた後に天女のお父さんが、難題を示して、そして、その難題を解くという形（難題型）になったり、あるいは、天女と男とが再び一緒になったとき、一年に一回会うようになったり（七夕型）、子供が産まれて、その子供があっちこちの地方に分散して行ったりという始祖伝説型といいますが、色々な民族、色々な地域の始祖になるという伝説ですね。そういうような形式があるというのです。そういうのを見てきますと、これは中国にもたくさんあるわけです。それで日本にもあるのです。日本の多くの地域で伝わっているのです。最近、雲南地方、現在の東南アジアにいる人々が、もともとは雲南地方にいたのが下りてきた。移住してきたということが考えられるわけですが、その、雲南地方ですね。中国の雲南地方にもあちらこちらに羽衣説話が伝わっているわけです。この地域の雲南の人々は文字を持たない人々が多いので、中国だからといって、みんなが漢字を使うということではなくて、文字を持たない人々が多いので、それぞれの地域の民族が口頭伝承したというのです。

### 3 雲南地方の羽衣説話

近年そういう民間説話が採集されて、まとめられて刊行され、それが日本語に翻訳されるようになって、そういうものが伝えられているということがわかったわけです。羽衣説話は、もっと、ほかにもたくさんあるのだと思いますが、雲南地方の少数民族に伝わっている羽衣説話が入っているというのが、私の知る限りだけでも4つあるわけです。はじめに、納西(ナシ)族の人類遷徙記ですが、これは、納西族の移住記なんですね。その移住記を中国語に著わしたものが刊行されるようになって、移住記の中に羽衣説話が入っているというのがわかったわけです。次に雲南におけるチベット族の羽衣説話、それから、苗(ミャオ)族に伝わる羽衣説話、最後にシプソンパンナー(景洪)のタイ族に伝わる召樹屯と嫡木娒娜の、「チャウシュートンとナムルアナー」と読むらしいですが、「スダナとマノーハラー」との物語なんです。これが、シプソンパンナーのタイ族に伝わっていることがわかったんです。

ちょっと、地図を見ていただきたいんですが、国の一番南側にあるもの、これが雲南省です。チベット族というのが、現在雲南省の一番西の北にいますので

す。ここにも羽衣説話があるのです。そして、納西族というのが、その南ですね。そして苗族というのは雲南省の東北、そして南東に住んでいるんですね。それからタイ族は、雲南省の東部、シブソンパンナー（景洪）というところの一带に住んでいるのですね。そこにタイ族が住んでいる。名古屋で行われた石井米雄先生の講演によりますと、ミャンマーのシャン地方にはシャン族即ちタイ族が住んでいるが、サルウィン川の西側に住むシャン族（タイ族）と東側に住むシャン族（タイ族）とでは、大分系統が異なるそうです。タイ族といいましても、色々なタイ族がおりまして、ランナータイと言われるタイ族の国も興っていたのですね。このランナータイ国は文字をもっていたようです。よくわからないのですけれども、シャンだけでなくたくさんのタイ族がいるのです。いずれにしても羽衣説話で、私がクメール文字で勉強しました「スダナとマノーハラー」とほとんど同じ物語が景洪すなわち、シブソンパンナーのタイ族に伝えられているらしいということがわかったのです。

いま、わかりにくいかもしれませんが、納西族とチベット族と苗族と景洪（シブソンパンナー）のタイ族、あるいはそれ以上に、羽衣説話が伝わっているかと思えますけれども、いずれにしても少なくともこの4つは日本語で読めます。シブソンパンナーのものは、中国語訳のものしかないですが、4つはほとんどが、前に述べた基本形式の後に難題型の物語が語られています。羽衣説話の難題は何かという焼畑農業をさせるということです。それが面白いと思うのですが、焼畑農業をさせる難題を出すわけです。今でも雲南の景洪（シブソンパンナー）の近くに焼畑をしているジノウ族が住んでいるようです。そこで、ちょっと、この景洪のメコン川の東側に住んでいるのがジノウ族です。焼畑をさせるという難題を与えるというのです。タイ族というのは、石井米雄先生がいていましたが、必ず水、河の側をずっと下りてきているのです。河を離れないのだそうです。タイ族は河を利用して移動するのだそうです。ですが、焼畑をする民族はちがうのです。民族のやり方なのだというふうに思います。

#### 4 タイに伝わる羽衣説話

それはそれとしておいておきまして、次に、私がやりましたタイに伝わる羽衣説話は、現在のタイに伝わっている羽衣説話といわれるスダナの物語、「スダ

ナ・ジャータカ」についてですね。スダナとマノーハラーの物語という意味なのですね。それはどういうストーリーになっているかといいますと、色々な所伝があります。パンニャーサ・ジャータカの「スダナ・ジャータカ」というのも、いくつもあるのですが、私がここで示しますストーリーは、タイ所伝のクメール文字で書かれた、スダナ王子とマノーハラーの物語の内容なんです。ミャンマーに伝わったパンニャーサ・ジャータカの「スダナ・ジャータカ」というのも、ジャイニ先生が校訂しておられるのですけれども、それも、大体一緒だと思いますが、それではなくて、私がタイから持ってきましたクメールで書かれたものの、ストーリーの概要をここに示します。

スダナ王子が生まれる。同じく、その町に竜王が住んでいた。隣国の王に殺されそうな竜王を漁師が助ける。竜王は漁師を招いてご馳走と土産を与えた。その後、漁師は美しいキンナリーたちを見て、それを捕まえたいと思い、竜王に懇願して不思議な絹索 (nāgapāsa) をもらう。竜王の輪縄です。漁師はその絹索でキンナリーのマノーハラーを捕えた。彼女は外衣を漁師に預ける。漁師はキンナリーのマノーハラーと外衣を王子に与える。王子はマノーハラーと結ばれる。外衣というのは、pāvaraṇa と私は読んだのですけれども、pāvarana かもしれません。pāvāra かもしれませんが、いずれにせよ、私の見た写本には pāvaraṇa とあります。私は、羽衣の外衣かなと思ったんですけれども。

次にキンナリーのマノーハラーが父親キンナラ王のいるケーラーサ山に帰ってしまう。キンナリーが何故帰ったかということについてですけれども、スダナ王子が出征中に王子の父王が自分の内臓が腹から出て、全インドを三度巻いて、再び腹の中に入るといふ夢を見た。その夢のために大供儀が行われ、キンナリーがその大供儀の対象になるという危険に見舞われた。マノーハラーは pakkha (翼) を返してもらって故郷に逃げ帰った。このところで、前に外衣だったものが翼となっているんですが、その外衣によって飛び上がるのですね。それがないと飛べないという設定なのです。

それからマノーハラーがいなくなっちゃったのでスダナ王子が探しに行くという設定なのですが、マノーハラーは自分の住む所に戻る途中、山の仙人に自分の指輪を託し、ケーラーサ山に行く方法を王子に教えるように頼んだ。王子は教えられた方法で山に至り、指輪を縁としてマノーハラーに出会う。王子はマノーハラーの父から難題を与えられる。難題は、葦の藪を一度に引き抜いて、



切り刻むこと、弓術の腕試し、同じ姿、同じ顔をした多くの女性の中からマノーハラーを見つけることであった。王子は、その難題を解決し、マノーハラーと再び夫婦となる。王子は両親を思いだし、人間界に妻を連れて戻る。これも難題型になっているのです。

## 5 羽衣説話伝承の諸相

このスダナの物語（タイ所伝のバンニャーサ・ジャータカでクメール文字で書かれているジャータカの物語）の内容を他のものと比べて見ますと、このストーリーのものは、根本説一切有部律やディヴィア・アヴァダーナあるいは、根本説一切有部薬事等漢訳やサンクリットにありますものとほとんど合致しているのです。マハーヴァスツにもこの物語が含まれているのですが、この物語はマハーヴァスツの場合は、竜王の物語と、王様の夢と難題を与えるという部分が欠如しているのです。竜王の持つ不思議な輪縄で、キンナリーを捕まえるという箇所が、マハーヴァスツの場合には *satyakriyā* (真実の言葉) の呪力で捕まえるという設定になっています。ですから、違うわけですね。多分、同じような物語が伝わったのだらうと思いますが、マハーヴァスツ系と有部系で少し異なって伝わったのだらうということがわかります。漢訳には根本説一切有部の系統と『六度集経』にも入っています。『六度集経』というのは、古い漢訳で、難しい分りにくい訳ですがここに入っております。その『六度集経』の方は、マハーヴァスツ系に近いと思われます。そうすると、タイ所伝の「スダナ・ジャータカ」は即断できないですけども、有部系かなと思われるんです。ただ有部律とディヴィア・アヴァダーナとかというところでは、キンナリーはチューダーマニとかチューダーラトナという髪飾りで飛ぶ。髪飾りの宝珠で飛ぶと言っているのですが、タイ所伝のものでは、羽衣になっているのです。あるいは、翼になっているということです。これが違いとなっているのです。むしろ、インドのものよりもタイに伝わっているものの方が羽衣説話という点では、近いのではないかと思います。

それから、中国雲南地方の景洪(シブソンバンナー)地方のタイ族に伝わる『召樹屯と楠木婁女南』の物語の筋書は、タイ所伝のスダナジャータカに合致しています。しかし人間に戻ってくるという話は欠如しています。それから、ラオ

スにあります。それは、『パンニャーサ・ジャータカ』が伝えられているということ、ヴィスッド先生が言っておりました。「パンニャーサ・ジャータカがラオスにあります。私は読んでいないけれども、私は読めると思います。なぜかという、ラオスの文字というのは、タイ文字と似ていますから、読めると思います」といっておられましたが、まだ読んでいませんといっておられました。

また、マレー半島のナコンシータマラートというあたり、タイ湾の西側に細長く出ているところがマレー半島になるわけですが、その細長い部分の東側、マレー半島の東側の方にナコンシータマラートというのがあるのですが、そこで、スダナ王子とマノーラターとの物語が伝えられています。ここではマノーハラーではなく、マノーラターとなっています。舞踏劇が行われていると、ある記者が書いています。まさにパンニャーサ・ジャータカのタイ所伝と同じストーリーのものが舞踏劇としてこのあたりにも伝えられているようなのです。それから、ビルマ所伝のスダナ王子物語も大体タイ所伝と同じです。それからクメール文字で書かれているものが、カンボジアにも伝えられていると思うのですが、私はカンボジアに1994年の12月に入ったのですが、この物語については、カンボジアでは、あまりきかなかったのです。カンボジアの Buddhist Institute から、クメール文字のパンニャーサ・ジャータカ25話だけ、前半分だけが印刷されていたのです。クメール文字で1953年に刊行されているのです。カンボジアが内戦状態になる前の非常にいい時代に、25話だけ刊行されております。後半部分は、刊行されていないのです。スダナジャータカは、この前半25話に入っています。しかし、カンボジアではタイのようにスダナ物語が、流布したかどうかわかりません。お寺の、たとえば、ウポーサタ堂の壁面の中を見ますと、佛伝やジャータカやアッタカターなどが描かれています。壁面に、図像が描かれているのですけれど、これはお寺といっても、アンコール・ワットのことはありません。現在のカンボジアのプノンペン郊外の田舎のお寺のことをいっているのです。これを見るとスダナ王子の物語は描かれていないので、案外それ程流布しなかったのかもしれない。まだこのことについてはくわしくはわかりませんでしたので、カンボジアの方が落ちついてから、また調査して勉強したいと思います。

それから、このタイ所伝のスダナの物語を見て見ますと、竜王が出てくる物語の部分は、浦島伝説に似ているというのですね。夢の内容、王様の夢によっ

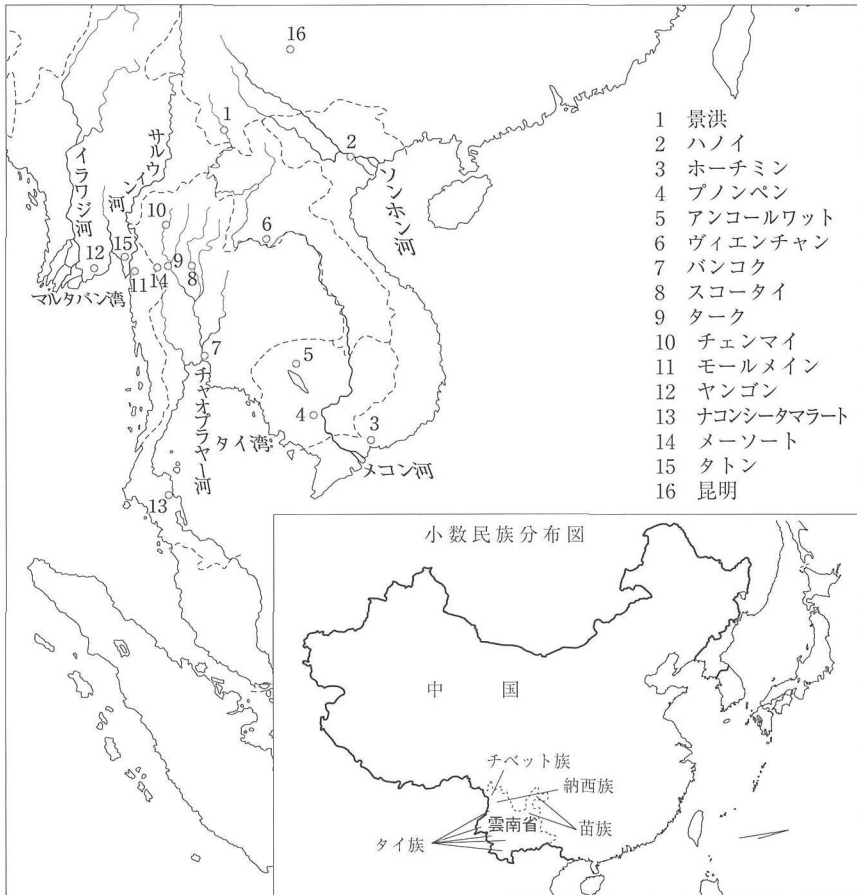
て大供犠祭を行うという記事は、マハースピナ・ジャータカにあるのですが、この夢の内容とは違うわけです。パセーナディ王が、夢を見て、供犠をするという話は古くからあるわけなんです。供犠とは、動物を集めて、それで生贄をするという犠牲祭のことです。マハースピナ・ジャータカには16の大夢が出てくるのですが、スダナジャータカの中の夢の内容は異なっていて面白いと思います。次の難題のモチーフの部分ですが、指輪を縁として再び結ばれる点は、シャクンタラーのモチーフと一緒にです。そして難題のところはナラ王物語と一緒になんです。だから、この難題はインドのモチーフになっているのです。このことを中国の雲南地方と併せて考えて見ると、タイ族に伝わっているチャウシュートンとナムルワナーの物語をみると、チャウシュートンはスダナですよ。それから、ナムルワナーというのは、おそらく、これはマノーハラーのことだと思います。各地でマノーハラーをノーラーといたり、マノーラーといたりしています。口承伝承ですね。口承伝承で伝えられた難題と言うのは、同じストーリーなのに雲南の景洪に伝えられるものでは、焼畑になっているのです。ところが、文章にしたものは、インド系のナラ王と同じものになっているのです。

## 6 東南アジアにおける羽衣説話伝承の謎

そのくらいのことしか解からないのです。では、一体、どうしてこのようなことをしているかという、口承伝承のものと書承伝承のものについて考えなければと思うのです。本来はチューダーマニ（髪飾りの玉）で空中を飛んだものが、翼に変わったり、外衣に変わったり、あるいは、難題の内容が口承伝承の場合は違ってきたりということが考えられるのです。本来タイ族に伝わっていたものと、インド伝来のジャータカとはミックスされて変わっていったのだろうと言うことは感じるのです。それとタイ族にも色々なタイ族があるので、このスダナジャータカが、全体のタイ族に伝わっているのか、それとも、シャン族にも伝わっているのかということを知らなければならないと思います。タイ族の中の一つのもの、ランナー文字で書かれたものには、パンニャーサ・ジャータカというのではないのでしょうか。それから、パンニャーサ・ジャータカを今のタイ人は、チェンマイ・ジャータカというんですね。ということから、こ

れは北で作られたのだと思われるのです。チェンマイの僧侶（サーマネーラ）が編纂したというのですけれども、50のうちの興味のあるものの多くが、その土着の土地から作られたのじゃないかと思われるのです。このスダナジャータカに関する限り、これははっきりと有部系の物語をつたえています。有部の教えがタイの東北部までどのように入ったのか。石井米雄先生によると、チェンマイとか、チェンラーイとかいうシャン族のところに上座仏教が入っていったのが13世紀以後だそうです。それが、どうやってその地域に入ったかというところとチャオプラヤー河を通して入ったと考えられます。乾季にはチャオプラヤー河がとぎれとぎれになっちゃうのだそうです。それでマルタバン湾のモールメインというところがありますね。そこから、メーソートに陸路に行くことはとても簡単だそうです。そこからタークに歩くのは簡単だそうです。そして、そこからスコタイに行くのも簡単なんです。このルートで上がっていったのだらうと言われます。そこにタークの北のほうにスワンカロクがあるようですね。スワンカロクの茶碗（ちょうど千利休の頃ですか）などの焼物が日本に伝わって来ていますけれども、スワンカロクがタークの北にあるので、このあたりは栄えたのですね。さらにタークの東にスコタイがあるので、そういうふうに仏教が入っていったのだらうというわけです。これは上座仏教がタイに入ったルートですね。それでは有部系のものがどのように入ったのかなというのが謎なんです。いろいろ考えられると思うのですけれども、初めから入っていた。ミャンマーのタトンのほうには仏教が最初に入っているわけですから、仏教の諸部派が入っているのですから、そこから入ったのかもしれない。いずれにしても有部系のものが入っていたということと、スダナジャータカを受容した民族は何であったかということを知らなければならないと思うのです。タイ族だけなのか、ミャンマーやラオスにもあるということはミャンマーやラオスにすむタイ族にだけ入っているのかということとかを知りたいと思うのです。またクメール文字のバンニャーサ・ジャータカ、ビルマ文字のバンニャーサ・ジャータカ、ラオスのバンニャーサ・ジャータカをみんなでもう少し勉強していくと色々なことがわかってくるのじゃないかという結論に落ち着くわけです。

（本稿は1997年11月18日、大谷大学1号館1110教室において本共同研究の一環として開催された公開講演の筆録である。文責、吉元信行）



- 1 景洪
- 2 ハノイ
- 3 ホーチミン
- 4 プノンペン
- 5 アンコールワット
- 6 ヴィエンチャン
- 7 バンコク
- 8 スコータイ
- 9 ターク
- 10 チェンマイ
- 11 モールメイン
- 12 ヤンゴン
- 13 ナコンシータマラート
- 14 メーソート
- 15 タトン
- 16 昆明

少数民族分布図

中国

チベット族

納西族

雲南省

苗族

タイ族